

尾崎左永子百首

佐伯裕子 選



尾崎左永子

悲しみのうすれゆくときみつめるし栗の若葉をまぶしと思ひし

「さるびあ街」

菜種畑花さかりなる匂ひあり日光ひかみなぎらふこの狭間はざまに

しげりたる桃の一木がみえをりて薄雲うすもろくも空暑くかがよふ

微のごとき花と思ひてかすかなる三つ葉の花を折ることもなし

街なかに別れ来りてしづかなる夕雲見をり電車の窓に

かすかなる夫の寝息を聞きわしがわが寂しさと関はりもなし

戦争に失ひしものひとつにてリボンの長き麦藁帽子

寒き風吹きすさぶ晝に牛乳の中に眞紅き苺を食うぶ

レンズの如き平らなる雲光りて風疾き舗道の上の夕映

埃上ぐる春の疾風はやちに吹かれ来て脂光れる鯖まぐろを購ふ

芽の白きグリーンピースを沈めたる水に雪ふる店先を過ぐ

信じたき心ふたたびいましめて疊に置けり黄色の鞆

水盤に湛へし水に黒き虻溺るるさまをながく見てあつ

ゆくりなく放たれし赤き風船が雲に近づきながらかがやく

街路樹も舗道も暑く渴きたりかかる風の目を君は愛しき

つやつやとせる櫻桃のつぶら實を噛みて唐突にかなしみきざす

携はる放送の仕事のひとつにて毒蛾育てる室に入りゆく

紅の雲褰せてゆく過程にていつより昏るといふけぢめなし

湖の上のあかるき風に罅のごとき風紋みえて吹き移りゆく
街路樹の冬木のかげが閉ざされし鉄の扉にとどきてゐたり
うつつなく電車にをれば軸もちて回ることくに街曲りゆく
サルビアの小花散りしく黒土のうるほふごときゆふべとなりぬ
低き炎立ちつつ炭の匂ひるる夕べかへり来て手を洗ひたり
冬の苜蓿に壓しをり別離よりつづきて永きわが孤りの喪
明日想ふことも寡し雨の街に明るく黄なる傘をひろげて
ぬるき水のみ干してをり靄厚く立ちて重量感なき昼の街
空間に翳あるごとき舗道の上歩み来て春の帽子をえらぶ
いさぎよく己保ち来て寂しきか春の囊はまつげ濡らしつ
サフランは花菱へつつ時計店の時計まちまちに午後を迎ふる
内乱のみじかき記事を読みしかど乾きし砂に花の種蒔く
葎干す漁港昏るとき二つまみの塩のごとくに白き猫ゐる
花舗出でしとき急速に夕映えて夕街は炎ゆ樹々もガラスも
昏れ早きビルの内部に入りしとき無人の階を声下りくる
生活の相似は懼れ伴ひて層なせる窓おのおの灯る

『土曜日の歌集』

つぎつぎに匂ひ異なるなか歩む果実店薬局木材店の前
エリユールの詩集を置けばまひるまの珈琲店の白き卓翳る
掃除機にボタンを吸ひてからからと寂しき音すしばしにて熄む
思ひ出となりたるゆるに痛切の過去やすやすと語られてゐる
空色のバケツ置かれし埠頭来て厚き雲閉ざす冬の海にあふ
わが履歴の一隅に遠き坂があり赤きサルビア目すがらに照る
透きガラス鋭く撃ちて藤の実の弾けし音は一瞬の音
失ひし金魚模様の浴衣など思ひてゐしが花火終りつ
鉄の階のほれば硬き反響の頭をたらぬきて寒し夕べは
海ぎはのあぢさゐの花枯るるころ波は階なして光を寄する
電光のニュース動けり夜の空に垂直に昇る文字の断片
常ならぬ内の焦燥に苦しめば浜るんどうの黒き莢乾く
雫する夜の梧桐の下あゆむ別れ来てすでに寂しきものを
夕光の了りしのかも吾が貌の明るくあらん青き夕昏
おのづから丘の形を保つ畑馬鈴薯畑はまだ花咲かず
雪ふれば鋭き音のせぬ夕べにて鉄梁暗き街と思ひぬ

『彩紅帖』

水族館出て来て髪が腥しをはりに視しは雲丹の紫

水芭蕉花しろき原に霧うまれまた霧生まるわれのめぐりに

生命なきものの香充ちて博物館の白き獣骨に秋日射しみつ

記憶のなかのかの丘の上円かなるけやきは春の曇りに立てり

風鏡きガラス戸は内に暖房の空気と人の匂ひを隔つ

造らるる高架路は昼の侍めなき曇りのなかに緩く傾く

エスカレーターにて地下に入りゆく時のまの膠着 わが掌虚しく垂れて

暗黒にとどろく音の塊を先立てていま地下電車来る

身体ごと耐へつゝつゝたり鉄杭を大地に打ちこむ痛切の音

高層街の裏歩むとき地下倉庫灯りて曇をまとめめる音

ひしめきて黄の花咲けるブリムラの鉢売れり春は地下にも在らん

おびただしく人通過して人棲まぬ地下街の花舗 花の堆積

埋立地よりみゆる団地は淡々と螢光灯る窓の重なり

野の虹も立たざるまでに渴きたる大地の窓に窯の火は燃ゆ

火を三度重ねて焔と呼ぶといふたまゆらのわが生もかくあれ

夢すらや雪にし白く曝されん吹雪の中にこよひ眠れば

『炎環』

星の井とよぶ井のありて春の雪やみたるのちの新月ほそし

冬芝に來し山鳩が円光を冠ぶるものごとく近づく

木枯しは空より落ち來高層の街の舗道に午後の日淡く

目の青き冬の鰯を満たしめし木箱に朝の雪が散りくる

思ふこと遊びに似んか遅速なくわれに近づく死といふ現

花ふぶく日に逝きしかば告白の機を失ひしごとく思ひぞ

光さす電車の席に小鬼らが遊ぶを見つと鏡花は言へり

驕り易くかつ若くして或る時は甘美に見えき死といふことも

日常の安堵といはん視野のうちに常動きるわが少女ゐて

地下の階くだるすなはち冷房の冷氣うごけり海に入ることし

葉ざくらとなりてしばらく抑圧のごとき翳りは坂をおほひぬ

一樣に透明の箱に詰められて桜桃の実は地下街に照る

光さへ透明の香をもつならんこの青谿に羊歯ほぐれゆく

日の果ての荒浜に來てわれは聴く不揃ひに渚打つ波の音

魚の背に裂かるる池面かすかなる渦をのこしてしづまりゆけり

夕闇の山茶花の白ほのかなる声の氣配をもちてあかるむ

『春雪ふたたび』

暈月はいつまでもみゆ小駅を黙殺しつつ行く電車より

追ふ鳩を脱るともなく避けて歩む鳩あり好悪いづれの表示

帆走を終へたる舟が春光を覺むごとくに帆をおろしをり

衝動に随ひてすばやく事をなす俊敏の快をすでに失ふ

発車待つ電車のドアの開かれて早春の日が床照らしたり

ある限度よりぬき出づる樹の無くて雑木原遠く冬日にけふる

水もはやぬるみて魚のひるがへるさま伝へつつ萍うごく

見えざる者奔くごとき秋の気はほろびし古都のゆるるの現ぞ

告白を聴かされてゐるとまさへ減りゆくわが生散りゆく桜

佐藤佐太郎門下の新鋭だった尾崎左永子は、近代短歌の

「写生」の手法を用いながら、都市空間に生きる現代女性の心理のゆらぎをうたった。敗戦の後に復興し、急速に成長した都市の明るすぎる孤独を、職業をもつ女性の眼で活写した。『さるびあ街』『土曜日の歌集』は、今日の女性の歌にも通じる平明な口語発想を拓いたものだ。最新歌集『春雪ふたたび』にいたるまで、その都会的な失意の思いは、風物の確

わが乗れる電車の影は秋分の光切りつつ街を過ぎゆく

炎の核のごとくに昏き透明を保てり口に思想は言はず

人の死をのぞみたることありやなし禱りは時に己れを暴く

冬晴の銀座通りは北側の壁みな照りて白き午後なり

力こめて触れし扉がたはやすく開きしかば閃く悔の如きもの

浴槽にみたす深夜の湯に溶けて形失ふごとくゐたりき

指組むは禱るにあらず内深くきざす光を待ちゐたるのみ

やはらかに踏む春の苔つづきゐてわれも地表に息づくひとり

雨傘をたたみて入りしデパートに吊らるる傘の列が明るし

歌の表記・ふりがなは歌集に準拠しています。

かな描写に支えられていかにもみずみずしい。

五冊の歌集から百首を選んだのだが、不幸な結婚生活などを直截に表す歌よりも、風物に心情を仮託する歌に多く惹かれた。高層ビルの灯にも似た、特有のひんやりした描写をまとうことで、従来の愛憎の感情が、新しいリアリティを獲得しているように思われたからだ。都会の平淡なたたずまいに潜む、微かな驕りと悲愁を伝え得たならば幸いと思う。

佐伯裕子（さえき・ゆうこ）「未来」会員